アルゼンチンと私　～ 亜国の常識と日本の非常識 ～

JECK評議員　肥後 照雄

終わってみればあっという間の2年間であった。JICAシニアボランテイア（以下、SV）としてアルゼンチン（以下、亜国）に昨年9月末日まで滞在した。

なぜか同国とは浅からぬ縁がある。亜国に初めて足を踏み入れたのは、S社現役時代の1977年2月、35年前のことである。以来、出入国は現役時代4回、JICA専門家4回、同SV9回、計17回目、累計滞在年数は約5年間となった。過去約40年間、海外で仕事・生活をしてきた。その間、日本出入国90回、世界約100か国、400都市を訪問・滞在したが、今や同国が訪問回数、滞在年数・都市数ともに最も多くなった。同国との長く深い因縁・宿命を感じる。

同国でのミッションは、亜国中小企業が国際企業と対抗できる競争力の強化、QCDS（品質・コスト・納期・サービス）の確実な履行・定着、経営改善と企業体質改善。そして、指導内容は、企業診断手法、近代的経営技術導入、生産性向上に関する工場での実践的助言、日本的生産手法・制度の紹介（5S、カイゼン、中小企業診断士・提案制度など）であった。

この間のビジネス活動を振り返ってみると、出張・外出200回、訪問した企業200社、セミナー講師20回、主にバスと車での移動は5州30都市、距離は延べ46,000km（地球1周余）となった。

その結果判明したのは、極く一部の中小企業を除き、グローバル市場に競合できない。指導者のスキルが低く、工場現場での実践経験が乏しいなどおよそグローバルに程遠い。

このようにビジネスの相手としての亜国人は、誠にやりにくい。これらがなぜ経済発展しないのか、まだ5S、カイゼンなどが浸透・根付かない原因・遠因と感じた。

他方、プライベートにおいては、ここの異文化に戸惑いながらも、たくさんの陽気で明るい友人ができ、家族ぐるみの交流・交際をした。また、週末テニス、アサド（炭火焼ステーキ）を楽しんだ。

現地滞在中の日本人との話題や投稿記事などより共通している亜国の7不思議。日本では非常識、同国では常識、当たり前の行為・習慣を挙げると下記となる。

①まず自分

こちらの人の性格を表す言葉に「プリメロ・ジョ（まず自分）」というのがある。ある時、配属先の本部・全国支部から当地に参集、「支部活動報告会」が開催された。

まず肝心の司会が「レストランが混んでいた」の理由により1時間半の遅刻。各支部の代表も、遠方から来るという言い訳があるにせよ、ポツポツと途中参加。新たな遅刻者が現れるたびに、全員とのア・ブラソ（抱擁）、ウン・ベソ（キス）が繰り返され、会議が中断する。更に自分の言いたい事だけを喋りまくって「家族との予定があるから」と退席する人。持ち時間を気にしないで喋る人。スケジュールは大幅に遅れたのは言うまでもない。何よりも自分が優先される。

②時間・約束にルーズ

通常、ウン・セグンド（1秒）で3分、シンコ・ミヌート（5分）で30分待たされる。アスタ・マニャナ（また明日）とは、いつになるかわからないと理解したほうがいい。会議や打ち合わせは予定時刻から30分から1時間遅れて開始するのが普通。これが俗にいう「アルゼンチン・タイム」。

ある会社オーナーには、自宅でのアサド（ステーキ）パーティに招待しておきながら理由も説明もなく当日ドタキャンされたこともあった。どのようなことも平気で起こりうる。決して期待してはいけない。

③言い訳が多い・他人の所為にする

彼らとの会話で、"5年前訪問した時は経済力・生活レベルはブラジルとほぼ同等だったが、今は遥か彼方に離された。何故か?"と問うと、異口同音、即座に"政府が悪い、大統領が無能だ！"と言っていた。問題が起こる、納期が遅れる等など、何らかの言い訳、他人の所為にするのが得意だ。

④交通マナーの悪さも尋常ではない

「直進する車の左から強引に右折する」。「ウインカーを右に点滅、左に曲がる」くらいは日常茶飯事。横断歩道を渡っていても、特にタクシーやバスは、人を標的に突っ込んでくる。2重3重駐車も当たり前、警笛も鳴らす為の道具とばかりに頻繁に使う。せめて夜中の2時には止めて欲しいものだが、国や地元のサッカーチームが勝利した時には、フリンガー（熱狂的ファン）が、車の窓から身を乗り出して、国旗やクラブ旗を振り回しながら、近くの広場・道路を疾走する。最初はてっきり暴走族と信じていた。銀行やスーパーのレジで長時間待っていても平気で、よく文句言わずに堪えられると感心する。でも車に乗ると人格か変わり、高速の料金所などで並ぶと耐えられずブーブー鳴らす。

⑤衛生観念が希薄

ゴミ箱が目の前にあるのに道路にごみを捨てる。横断歩道を歩いていた時やバス停や地下鉄のホームでそういう人をよく見た。バスの運転手が信号持ちで紙屑を窓から捨てる場面も何度もみた。これには本当にたまげた。

それから犬のフン。こちらの愛犬家のマナーは極めて悪い。日本的に「処理用の小道具」を持って散歩する人は少ない。舗道の5m間隔に大きいモノがトグロを巻いており、随所に踏んだ後もある。市内ではアパート住まいが基本の所為か、犬の排泄のための散歩と理解することもできる。ある時、フンを避けようとした婦人が倒れて、別のフンに手をつくという大惨事を目の前で目撃した。

⑥全て店子の所為

借りたアパート設備の故障・不良は、全て店子の使用・操作不良の所為となり、修理の交渉・費用は全て借家人の負担。冷蔵庫、エアコン、ヒーター、温水器などがことごとく壊れた。厄介なのは、修理人やサービスマンがすぐ来ないことだ。復旧まで数週間から数カ月掛り、お湯や水が出なかったり、台所が使えなかったり地獄を味わった。

⑦生活用品・備品の品質の悪さ

煙草を吸う人の話では、100円ライターの品質がものすごく悪いらしい。全てではないと信じるが、この国の工業製品の品質の一端が窺える。1ペソ（約20円）と安いのですが、オイルを半分以上残したままで、大半は着火部分の不具合により廃棄。結果的には日本より高くつくそうだ。

また、練り歯磨き粉もしかり、数本同様な不良品と遭遇した。使っていくうちにプラスチック部分の出口根元が破れ、両方から出る始末。日本なら全て回収、ひいては不買運動、企業イメージを損ね経営不振になるところである。現地スタッフに不良サンプルをみせると、「中国製だ。蓋を閉め、脇から出し使えばいい。」との答え。この感覚が、ブラジルやチリにますます差をつけられ後塵を拝することになったのは間違いない。

ただ、困ったことは、同国との係わりが長くなったお蔭で思考・感覚がかなりいい加減になったと家族や友人に度々指摘されることだ。

ラテンアメリカ国民性による文化の違い、生きる原理の違いは分かる。しかし、グローバル市場と競合したいというなら、なぜビジネスマナー・ルール・生活態度を改め、変革しないのか、よく分からない。

やはり、亜国は農業国で、パンパに種を蒔いて放っておいても大豆は育つし、牛に餌を与えずとも勝手に生えている草を食べて大きくなるので、「食っていける」というのが根底にあると思う。もっと豊かになりたい欲がない。つまり、「ハングリー精神がない」のである。

日本のようにきっちり詰めて、中長期計画的にビジネスをするというお国柄ではない。額に汗を流して身を粉にして仕事をするのは好きではない。休日・休暇を返上してまで重要な仕事を終わらせる、納期に間に合わせる誠意・責任感も希薄。日本とは相互補完関係があるとよく言われるが実に好対照である。同国のことを知れば知るほど日本のことがよく理解できる。日本の常識は世の中の非常識であり、そこは多様性と理解する他ないと思う。

一方、本当に驚いたのは.東日本大震災が起こったときに配属先スタッフは勿論、テニス仲間、アパートの住人やタクシーの運転手など誰もが自分のことのように、日本人に同情し、お見舞いやお悔みの言葉をかけてくれたことである。友人かくあるべきと思った瞬間である。義理、人情、浪花節が通じ、家族・兄弟を大事にする亜国人、友人としては最高だと思う。

日本の7.5倍の国土を有し、人口は3分の1。原油や鉱物資源などが豊富で、高いポテンシャルを秘める亜国。いつかは大化けするかもしれない、魅惑の尽きない亜国。また行きたい国である。